

令和元年度 歴史シンポジウム



古墳をつくった人々
～墓制から文化の多様性を探る～

—記録集—

2020年3月
都城市教育委員会文化財課



序 文

都城市教育委員会では、都城の歴史をより多くの市民の皆様にご存知いただくために、平成22年度から、学校への出前授業や企画展を開催するなど、さまざまな取り組みを行っております。

本書は、去る令和2年1月26日に開催しました「古墳をつくった人々～墓制から文化の多様性を探る～」の記録集です。シンポジウム前半では、元宮崎県埋蔵文化財センター所長の北郷泰道様、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館学芸課長の吉村和昭様、鹿児島女子短期大学教授の竹中正巳様に御講演いただき、後半ではMRT宮崎放送ラジオパーソナリティの平山淳子様をコーディネーターにお迎えし、都城の古墳文化について紹介いたしました。

本書が、郷土の歴史に対する理解と関心を深める一助となることを期待しております。

2020年3月

都城市教育委員会
教育長 児玉 晴男

目 次

「“諸県君と髪長媛” 伝承の地の古墳文化」北郷泰道	1
「地下式横穴墓に副葬される武器・武具をめぐって」吉村和昭	5
「南九州・大隅諸島域の古墳時代人」竹中正巳	11
シンポジウム「古墳をつくった人々～墓制から文化の多様性を探る～」	17
コーディネーター：平山淳子（MRT 宮崎放送ラジオパーソナリティ）	

(敬省略)

講師紹介



北郷 泰道（ほんごう ひろみち）

元宮崎県埋蔵文化財センター所長



吉村 和昭（よしむら かずあき）

奈良県立橿原考古学研究所
附属博物館学芸課長



竹中 正巳（たけなか まさみ）

鹿児島女子短期大学教授



コーディネーター

平山 淳子（ひらやま じゅんこ）

MRT 宮崎放送ラジオパーソナリティ

“諸県君と髪長媛” 伝承の地の古墳文化

北郷泰道（元宮崎県埋蔵文化財センター所長）

こんにちは。都城は私のふるさとですので、しばらくぶりに都城に来られて嬉しく思います。今映像で見て頂いたとおりで、ほとんど私の話す事はそれに盛り込まれているという風に思いますが、とりあえず「古墳を見る」「古墳を考える」ということはどういうことか、ということをお話させていただきたいと思います。

先ほど、紹介にもありましたが、世界文化遺産に「^も舌鳥・^{ふるいちこふんぐん}古市古墳群」が登録されました。このことについては多くの方々のご承知かと思えます。ただ足を引っ張るわけではありませんが、「^も舌鳥・古市古墳群」が世界文化遺産になればそれで日本列島の古墳、あるいは古墳文化・古墳時代が理解できるのかという事実はそうではありません。もっと古墳時代の全体像を考えるには、多くの地域の古墳というものも、人類共通の財産として私は登録していく必要があるだろうと思えます。それで宮崎でも西都市を中心に、2012年、もう8年前になりますが、「世界文化遺産としての古墳を考える」というシンポジウムを開催して、昨年で7回を数えています。このような活動を行っているということをご存知だった方はいらっしゃるでしょうか？ちょっと顔見知りの方々の顔も見えますので、ご承知の方もいらっしゃると思えます。南九州の古墳もやはり、人類共通の財産として世界文化遺産に値するという風に思っております。じゃあその中身はいったい何なのか、ということが今日の私の話になってまいります。古墳を考えるシンポジウムの3回目には、このあと登壇頂く榎原考古学研究所の吉村さんにも加わっていただいて、シンポジウムを行いました。それと同時に「日本遺産」というものを、本年2020年までに全国約100あまりを登録していこうということが行われていて、宮崎も「古代人のモニュメント―台地に絵を描く南国宮崎の古墳景観―」という形で日本遺産に登録されました。これについてはご存知でしょうか？要するに南九州の古墳というものが、全国的にも注目される古墳としてあるということです。この日本遺産の構成としては、^{さいとばる}西都原古墳群・^{にゆうたばる}新田原古墳群・^{いきめ}生目古墳群、そして^{はすがいけ}蓮ヶ池横穴墓群というものが宮崎市にありますが、宮崎市・西都市、そして新富町の古墳及び横穴墓等を登録したわけです。ただ、南九州の古墳文化を考える上で、この都城盆地というものが全く蚊帳の外なのかというと、日本遺産の中でもやはりこの都城盆地の古墳文化、古墳というものを欠くことはできないだろうと思えます。登録される・されないは別にして、都城盆地の古墳というものが日本列島の中の古墳時代を考える上でも、非常に重要な問いを投げかけるものになっていると思えます。実は、この日本遺産の登録を機にして、今絵本を作っています。これは4世紀・5世紀を中心とした『古事記』『日本書紀』の中に表れる大王、のちの天皇と日向の女性たちの婚姻関係にある、代表的なものに^{もろかたのきみうしろい}諸県君牛諸井の娘であった^{かみながひめ}髪長媛が仁徳天皇に嫁いで、その子ども^{おおくさか}の大日下・^{わかくさか}若日下が誕生したということがあります。そういう『日本書紀』の記述を中心にして、南九州の古墳とその記述とがどういう風に対応していくか、といったところを絵本という形で皆さんに知っていただきたいということで、昨日最終編集をしまして2月末には印刷できると思えますから、3月には皆さんの目に触れる状態になると思えますので、またそれを見ていただければと思っております。

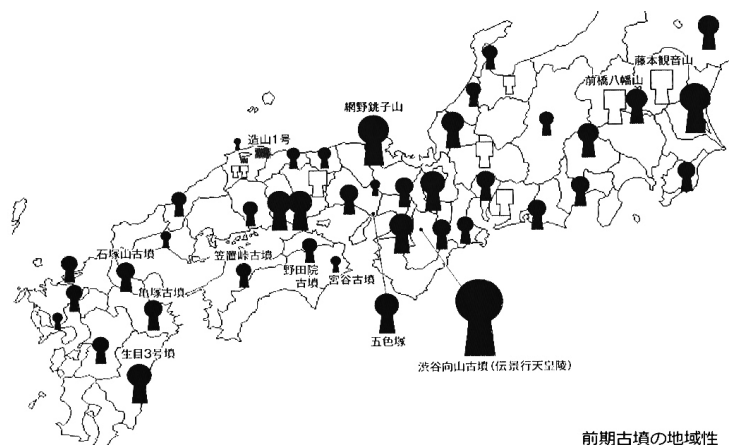
古墳というものはいったい何なのか、という基本的なところについては資料の中に詳しく書いております。ですからその詳細については、目を通していただければと思えます。世界文化遺産のシンポジウムで立命館大学の和田晴吾先生にまとめていただいた中で、古墳時代というものは古代国家形成過程を示すものであって、要するにこの日本という国の名前をもつ古代国家が誕生する、その誕生の前史になる時代ということです。「この国のかたち」を決めていったのが古墳時代とっていいだろうと思えます。ただ、お墓というのは亡くなった人を埋葬する場所ですけれども、たとえば昭和時代、あるいは平成時代というものをお墓から考える、あるいはその時代の全体像を示すということは今の墓ではできません。古墳時代

の古墳というのは、単にお墓というだけではなくて、その中から当時の社会の在り方・経済力・政治的な関係・地域の在り方が理解できます。それから副葬品などを見ていくと、どういうものが出てくるかによってその被葬者の性格・社会的役割といったことも理解できます。あるいは中国大陸の鏡が出てくる、朝鮮半島を由来とする遺物が出てくる、そういう中で海外交流も含めて東アジアの中での日本列島、そして限定して都城盆地がどういう役割を持ったのか、そういったところが全体像として見えてくる、それが古墳というものであるわけです。ですから単なる埋葬するお墓ということに留まらず、その時代・社会を知る糸口が古墳を見ていくとわかっていくということです。この中では古墳時代は国家形成の前段階にあたる時期であって、その時代がどういう時代であって、そして「この国のかたち」をどういう風につくっていったのか、というところが反映されている、示されていると理解していただければと思います。

全国に古墳、これは前方後円墳、円墳だとかいろんな種類がありますが、総数としては16万～20万基あると考えられています。ただ、一つ注意していただきたいのは、当時の人口というのはどのくらいだったのかということです。どのくらいの人口だったかご存知の方いらっしゃいますか？ だいたい多く見積もって450万、いろんな統計の考え方があるのですが、青森県から北海道を除いて、あるいは九州の方では種子島・屋久島を除いての地域に450万人の人が住んでいたということになります。それで今の人口でいくと、福岡県は510万人を超えていると思いますが、福岡県1県程度の人口が全国に散らばっていたという状況ですね。単純計算で行くと、一つの国、律令時代の日向国、ほぼ今の宮崎県の大きさで言えばその中にだいたい10万人くらいの人々が住んでいた、そういう時代であるということです。そういう時代に多くの人々の労働力を必要とする古墳が造られていたんだということをまず頭の中にイメージしておく必要があるだろうと思います。今の25分の1以下の人口であると、そういう時代に大きな古墳が造られたり、そして南九州独特の地下式横穴墓がなぜ造られていたのか、それを考えていく必要があるだろうと思います。それで、総数としては16万～20万基ですが、前方後円墳の数はだいたい4000～4700と考えられています。前方後円墳というものになぜ着目するのかというと、これは一応仮説ですが、前方後円墳は首長墓だという風に考えられています。地域のトップ、その地域の王様が前方後円墳に葬られると考えているわけです。ただその被葬者の「王」という性格だけではなくて、大きな古墳が造られればそれに労働力が必要とされるわけです。延べ何万人だとかいう人々の力によって、古墳は造られていくとなると、その地域の経済力・組織力・政治力だとかそういうものが古墳の在り方に反映されていくとみるわけです。

第1図では大規模な大型古墳・巨大古墳と呼ばれるものが、世界文化遺産に「百舌鳥・古市古墳群」という大阪平野の古墳がなったように、奈良盆地・大阪平野に大きな古墳が集中しています。ただ、これは畿内だけではないということで、例えば^{きび}吉備（岡山）、あるいは関東地方の^{こうずけ}上野（群馬）だとか、そういう地域にも大きな古墳があって、そして九州ではこの宮崎、鹿児島の大隅半島に巨大な古墳があるわけです。それではその意味をまずは考えていきたいと思います。

その前にもうひとつ、今年に記紀編纂1300年の年になりますが、720年、その8年前の712年には『古事記』が編纂されています。ですから『古事記』『日本書紀』という日本最古の歴史書が生まれてから1300年ということです。ただ残念なことに現在でも考古学者の多くは、『古事記』『日本書紀』というものをきちっと、真正面から捉えていこうとされていないということがあります。なぜそういう風になったのかということは、



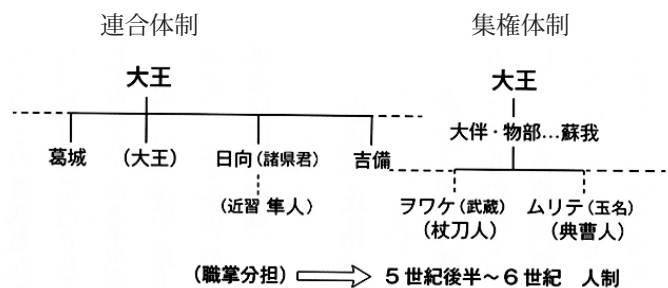
第1図 前期古墳の地域性

戦前・戦中の皇国史観といわれるもので、日本人がいわば暗い戦争に突入していったというトラウマもあって、『古事記』『日本書紀』という神話を中心とした部分というのが、歴史史実ではなくて作り話あるいは物語として理解すべきだと考えられてきたわけです。ところが戦後70数年の考古学の蓄積が出てきますと、私は『古事記』『日本書紀』の記述というのがむしろ実証づけられてきていると考えます。天孫降臨の神話というものも、これは歴史的に理解できるし、それから神武東征というのもこれは歴史史実として立証できると私は考えています。なぜかという、南九州の古墳を見ていった時にその答えが導き出せると考えているわけです。その前提として、これは『古事記』の場合ですが、^{かみつまき}上巻というのは文字通り神話の部分ですけれども、^{なかつまき}中巻、^{しもつまき}下巻というのは神武天皇から推古天皇まで、そして推古天皇以降が飛鳥時代ということになります。実質的な初代天皇は10代崇神天皇（3世紀半ば）と考えていますが、そう考えていくと、中巻、下巻というのは古墳時代の書物という風に言うことができます。従って、考古資料だけでは古墳時代を叙述すること、古墳時代の実態をあきらかにすることはできないだろうと思います。基本的に『古事記』『日本書紀』は古墳時代の書ということですから、それを正面から向き合って解き明かしていく、そして考古資料と突き合わせていくことが必要だと思います。

それでよく上げられるのは、「前方後円墳体制」というものがある、前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳、このような序列関係があった、そして大きさも序列関係があった、大きな力を持つ人々からだんだん小さな人々、小さな力しか持たない首長というような体制があると考えられます。ところが実際の古墳の在り方というのを見ていくと、確かに奈良盆地・

大阪平野を中心に大きな古墳があるんですけども、先ほどの吉備だとか九州でいえば宮崎に古墳時代初め頃の大きな古墳があります。ところが関東地方では前方後方墳（前も後ろも四角い古墳）というのがあります。それから出雲の地域では、四角い古墳を持つという時代があります。そうやって見ていくと、それぞれの地域のアイデンティティの示し方というのは、おそらく単一元的なものではないのではないかと考えられるわけです。古墳時代の前半期においては、第2図に示したように連合体制、大王（のちの天皇）も横並びの時代があります。その中で日向では諸県君の存在があったということを見逃してはいけないうと思います。これは5世紀の中頃から6世紀にかけて段々、前方後円墳体制といわれるものがピラミッド状に造られていったと理解できます。ですから、この畿内との関係とか単純に言いますが、その中身は連合体制から集権体制へと変わっていくと見ておく必要があります。そしてもう一つ、第3図で九州の前方後円墳の在り方を見ていくと、北部九州はほぼ万遍なくありますが、南九州では日向灘に面した地域にしかないということです。それで唯一都城盆地にも前方後円墳がある。ではこの意味はいったい何なのか、ということは後のシンポジウムの中で見ていきたいと思えます。

最後に、大きな古墳が造られている第4図の400



第2図 畿内政権の構成



第3図 九州の前方後円墳の分布

地下式横穴墓に副葬される武器・武具をめぐるって

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 吉村和昭

皆さんこんにちは、吉村でございます、よろしくお願いします。

「地下式横穴墓に副葬される武器・武具をめぐるって」ということで、時間は20分ということで短いので、その中でもどちらかというと、被葬者の性別と武器の関わりとか、どういう親族関係にあるのかという、骨と遺物からわかる関係の話をしていきたいと思えます。

私は南九州の出身でもないのでありますが、私の専門はひとつの甲冑、これは全国的ですけれども、古墳時代の甲冑が専門なのですが、もう一つがこの南九州の地下式横穴墓です。きっかけは今からちょうど28年ほど前、附属博物館に学芸員として配属されてすぐの頃に手掛けました展覧会で「隼人 古墳時代の南九州と近畿」というものを担当しまして、それをきっかけに地下式横穴墓や南九州のことに興味を持ったということでございます。

皆さんが古墳といったイメージはやはり西都原古墳群とか、ぼこぼこマウンドを持った古墳ですよ。こういうものが一番のイメージだと思います。西都原古墳群の男狭穂塚・女狭穂塚といういわゆる前方後円墳、こういうものがイメージされると思います。私が今日話しますのは地下式横穴墓です。これは南九州特有の墓制であるわけですが、写真1は小林市にあります^{ひがしにわら}東二原という今は古墳公園になっている地下式横穴墓で、天井が落ちて中が見えている状態です。基本的な構造は、台地の上に造られて垂直方向に穴を掘って、そこから横方向に掘り進んでいって遺体を葬る場所、それから副葬品を置く場所が造られるという構造になります。写真2は西都原にある一番大きな地下式横穴墓の玄室で、長さが5.45mで幅が2.2mもある非常に大きなものであります。

第1図は地下式横穴墓の分布域ですけれども、だいたい宮崎平野部、それからほとんど小林市になりますが西諸県のあたり、それからえびのになります加久藤盆地、あともう少し鹿児島側の大口のほうですね、そしてこの都城盆地、それから鹿児島志布志湾沿岸といったところに分布しています。地下式横穴墓の特徴ですが、地下の密閉空間で空洞なものですから非常に残りが良いということです。人骨も残りが良いし、副葬品も鉄製品が多いんですが、これも残りが良い状態です。写真3は高原町の地下式横穴墓ですけれども、骨もきれいに残っていて、貝製の腕輪を腕にして残っていると、こういう生々しいものもあります。写真4はえびの市のもので、天井が落ちていますが、甲冑、刀の類ですね。それから人骨もちゃんと残っています。人も何人かいるんですけど、



写真1 東二原3号地下式横穴墓 (小林市)

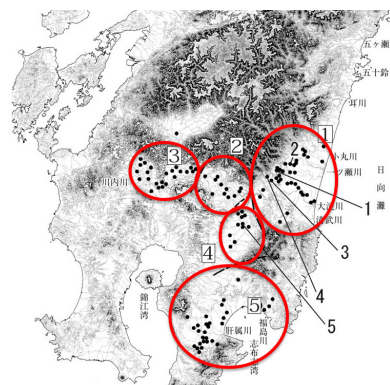


写真2 西都原4号地下式横穴墓の内部

【5地域区分】

- 1：平野部、宮崎平野部
- 2：内陸部、西諸県地域
- 3：内陸部、えびの・大口盆地
- 4：内陸部、都城盆地・北諸県地域
- 5：平野部、大隅半島志布志湾沿岸

1. 市の瀬
2. 常心原
3. 内屋敷
4. 中迫
5. 築池



第1図 地下式横穴墓の分布



写真3 立切^{たちきり}35号地下式横穴墓
出土人骨
(高原町教育委員会所蔵)



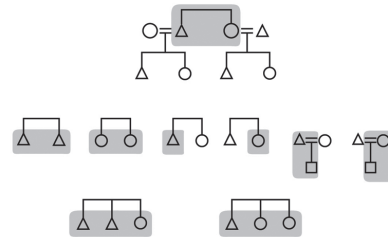
写真4 島内^{しまうち}21号地下式横穴墓(えびの市)



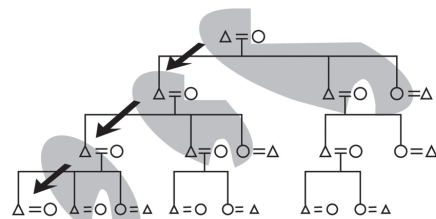
写真5 西都原4号地下式横穴
出土横矧板鉾留短甲

鉄製の武器類も良く残っています。写真5も非常に残りのいいものです。普通の土に埋まっている他の地域から出てくるものは、錆が進行してしまってこんなに表面がきれいに見えません。非常に残りが良く、武器そのものの研究にも非常に有益なものです。

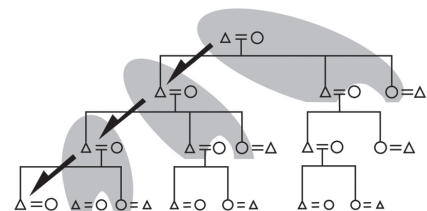
それでここからですが、南九州の古墳時代、特に地下式横穴墓を営む社会はどんな社会なんだろうか、ということをやっと見ていきたいと思います。その鍵になるのはやはり被葬者の骨であり、その中でも遺伝的な特性というものが非常に大事になってきます。写真3は歯がよく残っています。歯の中には表に出ている部分の幅と、奥行きといいますか、形とサイズですね、これにすぐく遺伝的な特性があるということが判明しています。特に親とキョウダイ、親子そしてキョウダイ関係まで類似点が非常に高いということがわかっています。イトコくらいに離れていくと、これは数値的には離れてくるということがこれまでの研究でわかっています。そういったことを研究されていたのが、亡くなられました九州大学の田中良之先生、私の恩師でもあります田中先生が進められた研究であります。大分県の横穴で出てくる骨を主に調査をされまして、古墳時代の親族関係が3段階に分かれて変化していくということを明らかにされています。一つが第2図の基本モデルIで、これは古墳時代前半段階まで、それ以前の段階もそうですけれども、例えば複数体の埋葬がある場合には全員血縁者が葬られる。網掛け部分が全員同じ墓に入っている人と考えてください。血縁関係にある男と女、あるいは男・男、女・女もありますね。それと親子の場合もあります。でも全部血縁者です。配偶者は入らないという形になります。ということで同世代の血縁者、キョウダイの場合、兄・妹、姉・弟、色んなもの含めてキョウダイになります。これはまだ父系にはなっていない状態ですね。双系の親族関係にあります。あとでもう一回説明します。この後5世紀の後半段階から出てくるものが、基本モデルIIで、複数埋葬ですと2世代構



基本モデル I



基本モデル II



基本モデル III △: 男性 ○: 女性 □: 小児

第2図 基本モデル I～III(田中 2008 より)

成が基本となります。これも血縁者が葬られるのですが、第1世代、まず初葬は成人の男性が葬られる。その時にお墓が造られて、その人の子どもたちがここに入る。しかも嫁いでいった娘も戻ってきて入る。ただその次の家長ですね、これは別の墓を造って、やはりその血縁者だけが入るといような形になります。造墓は相続の関係ではやはり男性、男性、男性とくるので、父系の親族関係になるということです。先ほどの双系の関係では、造墓が成人男性に限るわけではないということで、女性の場合もあったりして、父系の親族関係にはなっていないということでもあります。今回は関係ないですけども、6世紀の段階になると、基本モデルⅢのように一部では初葬だけ配偶者が入ってくるという関係があります。でもあととは全部血縁者しか入らないという関係です。今言いましたように、父系は男ばかり次へ次へと継いでいく。母系はその逆で女性・女性ばかり、そして双系の場合はそのどっちでもありという社会になります。皆さん家の家系図があったら親が書いてあって、だいたい自分の家のお父さん→お父さん→お父さん→お父さんはみんなわかりますけど、配偶者は誰その娘とか書いています。じゃあその人のお父さん・お母さんは誰かと言ったら、結局は実家の系図を見ていかなければならない。でもその家の系図を見てもそれもまた男の系譜しか書いてないので、その人のお母さんは誰かという、またそのお母さんの元々の家の系図を見なければならぬ。こういう形が父系の関係です。男でしかずっと系図を辿っていけない関係が父系であります。父系においては、造墓は男性家長の死を契機に行われるということと、初葬者が一番良い副葬品を持っている、特に初葬の成人男性（家長）が刀剣などを伴っていて、ほかの人が武器を持っていてもせいぜい鉄鍬とかその程度しかありません。あるいは成人の人が鉄鍬しか持っていなかったら、ほかの人は全く持っていないとか、非常に格差があるということです。

そうしますと、地下式横穴墓の社会はどうか、ということが一番問題になってきます。これにつきまして、先ほどの田中先生のグループ、私も一緒だったんですけども、実際に出土人骨を調べて分析をしました。高原町の2つの地下式横穴墓です。旭台と立切^{あさひだい たちきり}という2つの地下式横穴墓で出土した骨、特にさっき言いました歯の歯冠計測の分析ですね、それでまず血縁関係をみるということです。ただ、お墓の中から出てくる人というのは、結局死んだ年齢で発見されます。お墓に5人入っていると、全員死んだ時の年齢の骨なんですね。ですから生前の世代関係とか年齢構成とかはわからないのです。そうするとどうやって調べていくかという、実際には次の人を葬る時に最初の人を押ししたりするわけですね。これがバラバラと外れてしまうと次の埋葬まで十数年以上開いているとなる。しかし、数年程度しか開いていない場合だと、押しも全部ついてくるんですね、筋が全部ついたらまなんです。そういうものを勘案しながら、生きていた時の世代関係、親子なのかキョウダイなのかということ推定しました。そういった結果を分析しますと、被葬者はみな血縁関係にあるということ、それから同世代の被葬者については血縁関係にあるのでキョウダイであるということです。また親子または3世代に渡って葬られている場合があるということがわかりました。ということで双系の埋葬原理、基本モデルⅠということですね。ほかの地域、広く西日本の5世紀後半代になってきますと父系の埋葬原理に転換していきんですけども、5世紀後半でもこういう状況がありますので、この墓地では転換しないで基本モデルⅠのまま、双系の社会が残っているということがわかります。調べたのは2つの墓地だけなんですけれど、状況から見まして、例えば他の地下式横穴墓を見ますと、宮崎平野部では初葬の人骨の性別で女性の例が7世紀に下ってもあります。ですからまず、成人男性の死に基づいて墓が造られるわけではないということがあります。それから主要な副葬品、武器の副葬も初葬の男性以外に帰属する事例がたくさんあるということです。これも父系に転換していないという証拠になります。それで、全部の墓の人骨の調査をしたわけではありせんけれども、地下式横穴墓を造る社会においては7世紀代においてもまだ双系の社会を維持しているということが言えると思います。

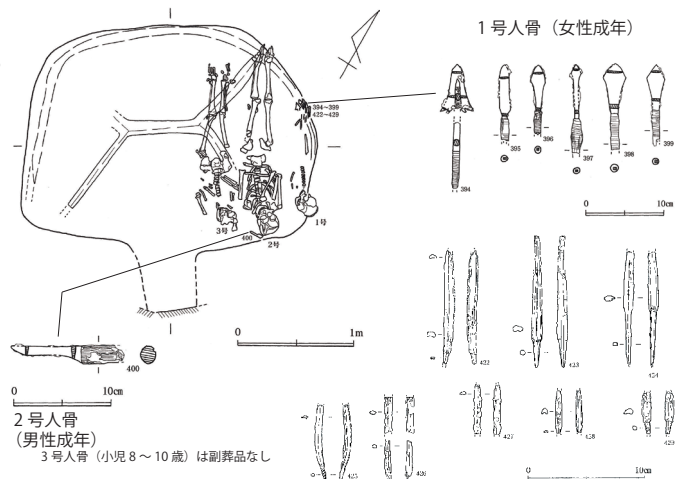
次に南九州の古墳時代はどのような社会だったのかということ、女性への武器副葬という観点からみていきたいと思います。副葬品ですが、古墳の副葬品の場合、性別の差異がこれまでの研究で指摘されています。例えば甲・冑といった武具は男性に帰属するものでありますとか、前期ですと銅の鍬は男性に帰

属する。それから鉄鏃・骨鏃も含めてですね、鏃については女性に副葬されることが少ないということが言われています。それと刀剣類、刀とか剣には大きな性差は現れない。鉄鏃は男性に隔たるけれども、九州においては女性に伴う事例があります。しかもそのうちの大半は宮崎県の地下式横穴墓の事例であります。今のような状況からみまして、女性に伴う武器の在り方をみますと、女性が軍事や戦に関与したのかというのが一つの大きな問題であります。岡山大学にいらっしゃる清家章氏は、刀剣類の検討、甲冑・鏃が伴わないことから、女性首長の軍事権への関与は低い、それから女性兵士が戦闘に参加することはないと論じています。では、地下式横穴墓ではどうなのか、先ほど言いましたように、女性に伴う武器というものが結構あります。そういう中で見ていくと、先ほどご講演いただきました北郷さんは、女性被葬者への武器副葬事例を集成・検討されまして、実際に女性が武装して、実戦力として期待されていたんだと主張されています。それに対して清家氏は、地下式横穴墓という特有の墓制であって、習俗の関係であろうと。だから地下式横穴墓で武器が女性に伴うからといって、これは軍事への関与ではないとおっしゃっています。これに関して、私は女性被葬者への武器副葬事例を検討しまして、北郷さんの意見を支持して、女性の軍事への関与はあったと述べております。これについては、鹿児島大学の橋本達也先生はまた逆の意見で、宮崎内陸盆地においてのみ女性も動員されるような頻繁な戦闘があったとは考えられない、鏃は武器としての機能より威儀具や葬送に伴うような儀仗であり、これは女性の武装・軍事への関与を意味するものではないという意見を述べています。これに対して私はまた反論しています。第3図はえびの市の島内39号という地下式横穴墓、これは3人葬られていますけれど、最初に葬られた人が20～40歳くらいの年齢の女性ですが、この人に一番の武器が入っています。鉄鏃がいっぱい、骨鏃もあって、ほかの人は刀子（ナイフ）とか、そんなものしか持っていません。

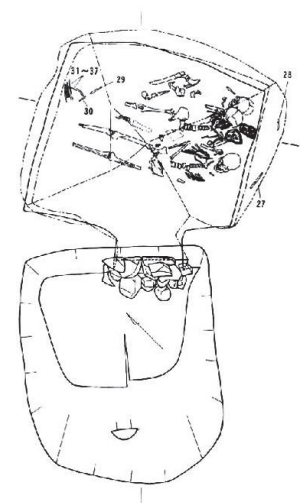
第4・5図は先ほども出てきました高原町の立切地下式横穴墓で、5世紀末くらいです。3人葬られています、女→女→男の順番ですが、一番武器をもっているのは、2番目に葬られた女性で、鉄鏃をいっぱい持っているという状態です。それと島内113号墓では5人葬られています、一番持っているのは3人目の3号人骨という老年の女性が多くの鉄鏃を持っています。

第6・7図は国富町の市の瀬5号墓ですが、2体葬られています、1号人骨は40～60歳くらいの熟年の男性、2号人骨は20～40歳くらいの女性が葬られています。この副葬品をみますと、第7図の左側が男性(1号)の方です。鏡もあって刀もあって、たくさん副葬品を持っていると思うんですが、右側が女性(2号)です。女性の方が刀の長さは負けているけれど、数は多い。そして鏃はいっぱいあるということですね。非常に男性にも拮抗するような副葬品を持っています。

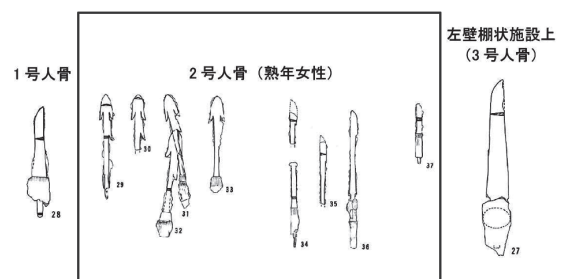
第8・9図は都城の事例です。築池地下式横穴墓で



第3図 島内39号墓 (えびの市)



第4図 立切40号墓 (高原町)



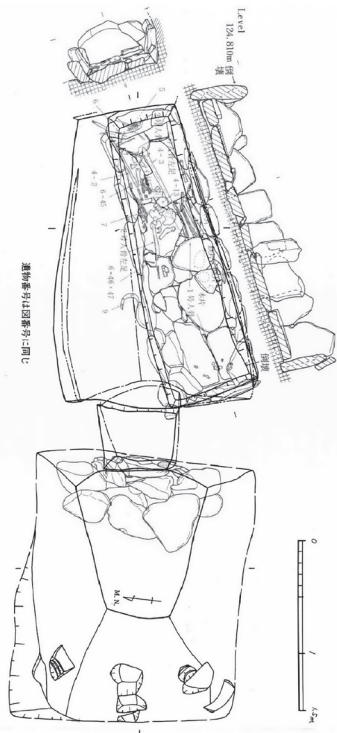
第5図 立切40号墓出土鉄製品

すが、第8図は女性1人しかいませんから1人の持ち物ですけど、剣と鉄鍬、それから骨でできた骨鍬です。それと第9図も築池の別の墓ですけど、やっぱり女性1人でこれだけ多くの武器が入っています。

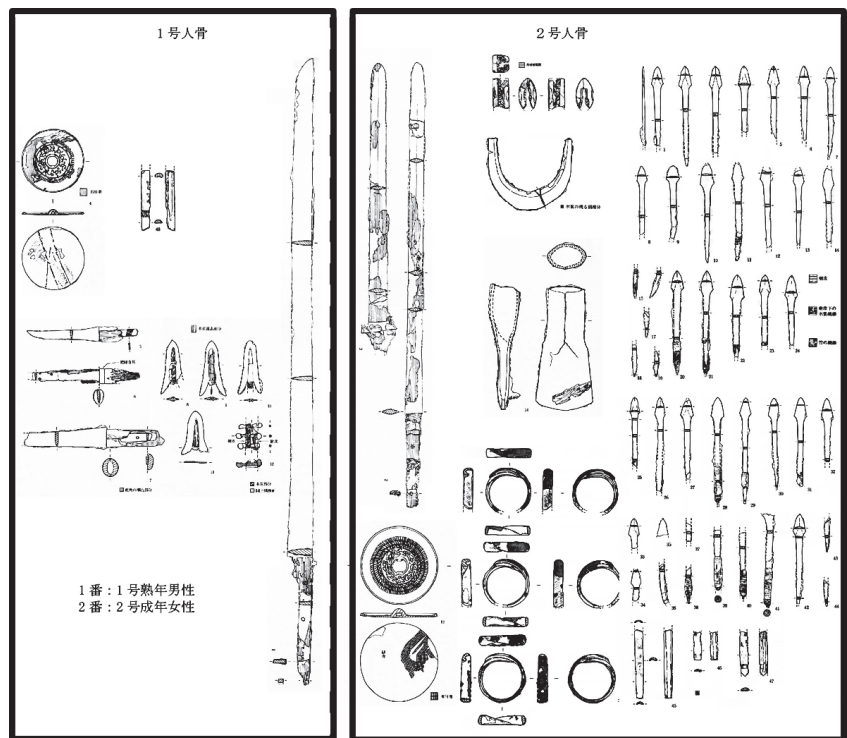
ということで、地下式横穴墓における女性への武器副葬を考えますと、まず墓の代表者である女性被葬者が一番良い副葬品を持っている。刀剣、鉄鍬という武器副葬が認められる事例があります。それと、それ以外の女性の場合にも武器副葬の事例が認められます。鍬が2～3本だったら象徴的に入っているという言い方もできると思いますが、先ほどの市の瀬で見たようにほとんど一束ですね、一つの戦闘単位くらいにたくさんの鉄鍬を持っているという点で、象徴ではなくてやはり実際の武器ということが考えられるのではないかと思います。そうするとやはり、一定の兵力として女性は期待されていたでしょうし、代表者の人が刀剣も持っているということから、女性の軍事権への関与というのも一定程度あったのではないかと考えるわけです。

それで最後になりますが、少し時代は下りますが『続日本紀』、文武四年、西暦で言うと700年の記事ですけど、この時に中央政権が種子島・屋久島方面に国境の確定のための覓国使という使節団を送ります。この人たちは武器を持って行ってるのですが、ちょうど帰り道に武器をもった現地の人に脅された記事が出てきます。その中を見てみますと、「薩末比売・久売・波豆」というのが出てきて、この人たちを含んで兵をもちて覓国使らを脅かしたということが書いてあります。これに対して^{くつしのそうりょう}笠志惣領、後の大宰府にあたる場所に命じてこれを捕まえて処罰せよと、そういう記事です。この「薩末比売・久売・波豆」は全部女性と考えられています。少なくとも比売は絶対女性です。この場所は地下式横穴墓の場所とはちょっと外れた鹿児島でも西の方になりますが、この社会の特質を表しているのではないかと思います。少なくとも女性が武器を持って、兵というか人を率いて使節団を脅すという行為をしているということで、やはりこの社会というのが、女性もある一定程度軍事に関わっていたのではないかと考えております。

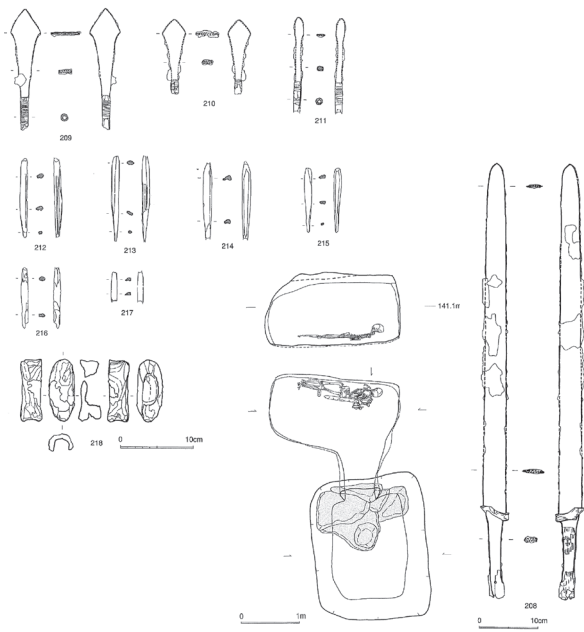
ちょっと短い時間だったので駆け足でお話しましたが、またシンポジウムの折にももう少しわかりやすく話したいと思っております。ありがとうございました。



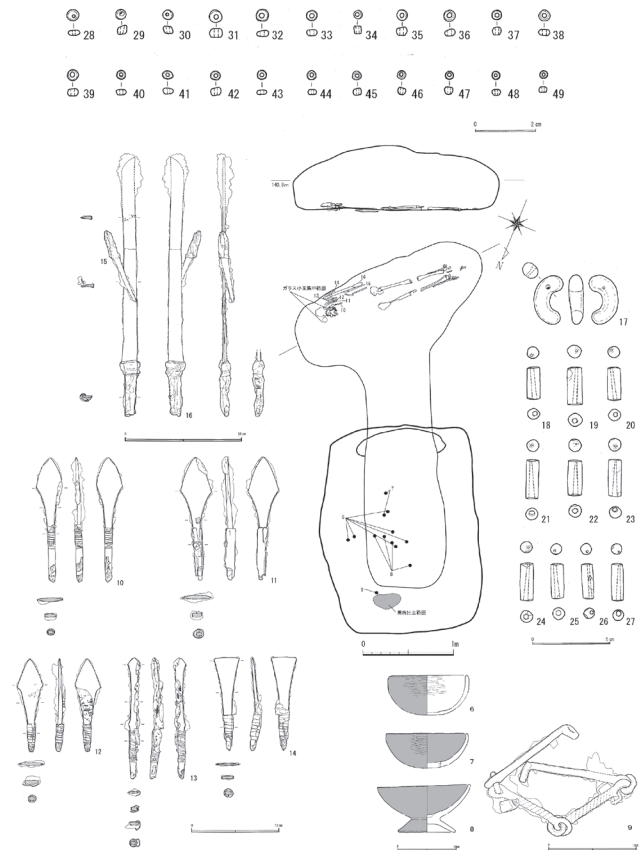
第6図 市の瀬5号墓(国富町)



第7図 市の瀬5号墓副葬品(縮尺不同)



第 8 図 築池 2001-3 号墓



第 9 図 築池 2009-1 号墓

写真 1・5：吉村氏提供

写真 2：宮崎県教育委員会 2007 『西都原 173 号墳・西都原 4 号地下式横穴墓・西都原 111 号墓』
特別史跡 西都原古墳群発掘調査報告書第 6 集

写真 3：高原町教育委員会より提供

写真 4・第 3 図：えびの市教育委員会 2001 『島内地下式横穴墓群』えびの市埋蔵文化財調査報告
書第 29 集

第 1 図：北郷泰道 2006 「再論・南境の民の墓制」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第二号
宮崎県西都原考古博物館 を吉村氏が一部改変

第 2 図：田中良行 2008 『骨が語る古代の家族 - 親族と社会 -』柏書房

第 4・5 図：高原町教育委員会 1991 『立切地下式横穴墓群』高原町文化財調査報告書第 1 集

第 6・7 図：国富町教育委員会 1986 『井水地下式横穴墓群・市の瀬地下式横穴墓群・上ノ原遺跡』
国富町文化財調査資料第 4 集

第 8 図：都城市教育委員会 2004 『築池遺跡・十三束第 2 遺跡』都城市文化財調査報告書第 67 集

第 9 図：都城市教育委員会 2010 『都城市内遺跡 3』都城市文化財調査報告書第 101 集

南九州・大隅諸島域の古墳時代人

鹿児島女子短期大学 竹中正巳

竹中でございます。本日はよろしく願いいたします。

「南九州・大隅諸島域の古墳時代人」ということで、今日はお話をさせていただきます。南九州の、特にこの宮崎県域の古墳時代にどんな人たちが住んでいたのだろうか、そこにフォーカスを当ててお話ししようとするとしても種子島くらいの話が入ってきてしまうものですから、こういう題にさせていただきました。皆さまのお手元には資料があると思いますが、そこでは南九州の古墳時代の人々の暮らし、人骨からわかる様々なことを書いていますけれども、今日のお話では、どんな人たちが、どんな顔つき、どんな体つきの人たちが住んでいたのだろうかということをお話させていただきたいと思います。今日皆さまに見ていただきますのは、宮崎・鹿児島・種子島、そして題とはちょっとはずれるんですけど、もうちょっと南の奄美群島、奄美大島・喜界島・沖永良部島・徳之島から出土した人骨の写真を見ていただきたいと思います。

古い時代の人骨というものは中々残りません。良い状態で出てくるということはほとんどないのですが、先ほど先生方がお話をされました地下式横穴墓というのは、天井が落ちなければ空間が保たれるものですから、非常に良い状態で骨が残ります。ですが、たいていの土を被せて埋めてしまうお墓ですと、日本は酸性土壌、火山灰の土壌ですので、体が溶けて骨も溶けてしまっています。中々残らないのが実情です。そんな中で、残っている例をちょっと見てください。

写真1は先の2組の先生方からもありましたが、高塚墳、円墳ですね。南九州にもたくさん造られてます。これは南九州の西海岸、薩摩川内市の円墳で、あまたつらまえ天辰寺前古墳というところですが、ここが調査されました。このような塚を造る円墳の調査は中々できないのですが、人骨が残っておりました。ただ残っているといっても写真2を見ていただくとわかるのですが、一部だけですね。これは竪穴式石室という墓室の形式になります。上から遺体を納めたり、色んな副葬品を納めるのですが、一部だけ人骨が残っておりました。

両腕に貝輪を付けております。こういう高塚を造る人たちというのは、たぶん社会階層的には当時の古墳時代の人々の中でも上位の人々なのだろうと思います。そういう人たちの貴重な事例であります。腕の長さからすると、身長なんか少し推定できます。正確性では落ちるのですが、身長が低い人たちでそんなに外からの影響を受けている人たちでは無さそうでありました。

次は、地下式横穴墓です。天井が落ちていなければ写真3のように良い状態です。当時亡くなった方を悼んで



写真1 天辰寺前古墳 (薩摩川内市)



写真2 天辰寺前古墳出土人骨



写真3 島内89号地下式横穴墓出土人骨 (えびの市)



写真4 高城牧ノ原古墳群箱式石棺墓（都城市）



写真5 高城牧ノ原古墳群箱式石棺墓出土
1号人骨（女性・熟年）



写真6 櫛を付けている状態の1号人骨

そのままお墓に入れます。そしていろんなものを副葬したりもします。残っている人骨は私たちの肉や皮膚という軟部組織になるところ、それが朽ちただけです。あとは貝輪があります。他には稲籾が出たりとかですね。他のお墓では植物質、布とか、普通の土を被せた古墳ではなかなか残らないものが、この地下式横穴墓からは出てまいります。南九州ではこういうお墓が、宮崎から鹿児島にかけての東半分の地域に認められます。ですから古墳時代では有数の、残りの良い古墳時代人骨が出てくる地域であります。

また、髪長媛の話がありました。写真4～6は高城の石棺墓から出てきた人骨です。この石棺も中々人骨が出ないことが多いのですが、これも頭が主に残っている状態が出てまいりました。貴重な事例であります。写真5を見ていくと、顔半分がもう朽ちてしまっています。ですが、空間側の方は残っているという状態です。それで写真6の下の方を見ていただきますと、何だと思われませんか？櫛になります。櫛を付けた状態で、女性のだいたい50歳くらいの方だと思います。こういう多様なお墓が古墳時代、南九州にあるわけです。

写真7・8は、土に穴を掘ってそこに遺体を埋めて、そして埋めてしまう土坑墓の事例です。人骨は中々残りません。写真7・8は昨年なりかわの夏、我々が掘った薩摩半島南端の指宿市、成川遺跡という遺跡の土坑墓から出た人骨になります。非常に貴重で、頭から上半身、そして太ももの大腿骨の一部が残りました。中々土坑墓からは残りの良い人骨は出なくて、同じ成川でもたいていはもう土に帰ろうかという状態です。先ほどの写真の事例でも全身が良い状態で残って



写真7 成川遺跡 2019-2号墓（指宿市）



写真8 成川遺跡 2019-2号墓人骨

いるわけではありません。

離島の方では、砂丘地にお墓が造られることが多いです。次は種子島の砂丘地の土坑墓から出土した人骨です。こういった砂地ですと、写真9のように非常に良い状態で残ります。これはなぜかという、骨の主成分はリン酸カルシウムになります。カルシウムが主成分となります。貝とかサンゴというのはカルシウムからできております。この海辺の砂地の中にはそれらの欠片が入っています。ですから骨がしっかり残るといふことになります。ですから離島



写真9 ^{ひろた} 広田遺跡北区1号人骨（男性・壮年）
（種子島）

であっても、南九州の本土であっても、海岸端に埋葬されている人骨は、残りが良いのが通例でございます。逆に火山灰の黒土のところ土を掘って埋められた人骨というのは、中々残らないというのが実情です。人骨からは色々なことがわかります。一つ一つは述べませんけれど、発掘をしていると、「この人は男ですか、女ですか？」とか、「年齢はいくつですか？」とか、色々質問を受けます。病気とか色んなこともわかってきます。最近では人骨からDNAや微量の元素が取れるようになって、人骨をすり潰して研究する方法がすごく進展しています。

それで今日の南九州と大隅諸島の人々がどんな顔つき、どんな体つきをしていたのだらうというお話をする前に、日本人の成り立ちの大きなお話を皆さんに知っていただこうと思います。日本列島で人類が誕生したわけではないですよ、皆さんもおわかりのようにだいたい700万年前くらいにアフリカで人類が誕生しております。そして日本列島に人がやってきたのがだいたい4～5万年前なのでしょうか。人骨の化石ではだいたい3万数千年前というのが一番古い事例でございます。それで縄文時代、今から16,000～13,000年前くらいから約1万数千年続いた時代ですけれど、日本列島の縄文人は立体的な濃い顔つきをしていたことが想像されています。軟部組織が残らないのですが、骨の研究や最近ではDNAの研究で、縄文人の遺伝的な要素、DNAを色濃く残しているのが北海道のアイヌの人々だということがわかっております。アイヌの人々の軟組織を見れば、眉が濃かったり、髭が多かったり、そして目は二重であったり。そして耳垢が湿っていたりという特徴があります。縄文時代の人たちもそういう顔つきや体つきをしていた。縄文人は基本的に日本列島全域でほぼ一緒の特徴を持っていたと言われております。近年では、DNAの研究で東日本と西日本の縄文人の中には、DNAのタイプとしてちょっと違うものがあるという面白い研究等もあります。私はDNAの専門家ではありませんので、またの機会に譲るといたしまして。縄文時代の終わりから弥生時代にかけて大陸から、朝鮮半島や今の中国の地域から人がやってきます。そのような人たちは顔が長くて、面長で平べったい顔で、毛は薄い。そして目は一重ということになります。縄文人とは違ってきますね。こういう人たちがやってきて、生活も弥生時代になると、金属の道具とか水稲耕作とか、色んな形で生活も変わってまいります。もう日本列島の人々にとっては大革命です。こういうことをもたらした人たちが、地元の縄文的な人たちと混血をしていくことになります。そしてどんどん広がって、この人たちの特徴がどんどん後の日本列島の色々な所に広がっていくというのが、現代日本人の成り立ちの大まかなストーリーであると、大方の研究者が認めております。縄文時代の終わりから弥生時代、北部九州から山口にかけて朝鮮半島や中国からの渡来人がやってきて、それらの人々が時代を経るごとに日本列島各地に広がっていくというモデルですね。ですから北海道と沖縄の方には、縄文人的な遺伝要素が残る。ただし南の方の南西諸島の人々は、古代・中世以降、大陸や東シナ海を挟んで中国や朝鮮半島と日本の本土との関係で人もいっぱいやってきます。そしてまた、農耕も始まっていきます。それによって、北海道アイヌの人たちと比べてずいぶん本土の人たちに近いということになります。ただし、この本土の人たちと奄美・沖縄の人たちを比べれば、やはり縄文人的な要素がある程度残っているという様相です。

縄文人って出るところが出て、すごく顔がデコボコしています、立体的な顔です。それに対して渡来人はたぶん顔は平べったくて面長で、身長がすごく高い、163cmを超えるくらいです。縄文人は158cmくらいと考えられています。骨になると、写真10の左側が渡来系の弥生人ですね。大陸から渡ってきた人たちの遺伝子を色濃く残す人たちです。これは弥生時代の福岡の甕棺墓から出た人骨になります。右側は本州の縄文時代の人です。人骨を見る時の特徴としては、目の角のところがとても四角いですね。渡来系の人々から現代の我々もそうなのですが、骨になると目の角のところは丸くなっています。全体で面長になります。骨というのは今言いましたが、混血によって特徴が変わっていきます。ですから顔つきや体つきも、遺伝子が、遺伝的な背景が異なる縄文人と大陸の人たちが混血していくことになりますから、それによって変わっていきます。もう一つは、生活の環境で変わっていきます、ライフスタイルですね。この戦後の70～80年を見ても、畳の生活からテーブルと椅子があったりとかそういう生活、そして食生活に関して言えば随分様変わりしました。江戸時代から明治、明治・大正から昭和、そして平成・令和と、随分食事の内容も変わってきております。それらによってやはり日本人の、日本列島の人々の体つきは随分大きくなってきました。そういうことで、人の骨というのは遺伝でも、もう一つは生活でも、特に食生活等でですね、変わっていきます。



写真10 縄文人と渡来系弥生人の頭蓋の比較

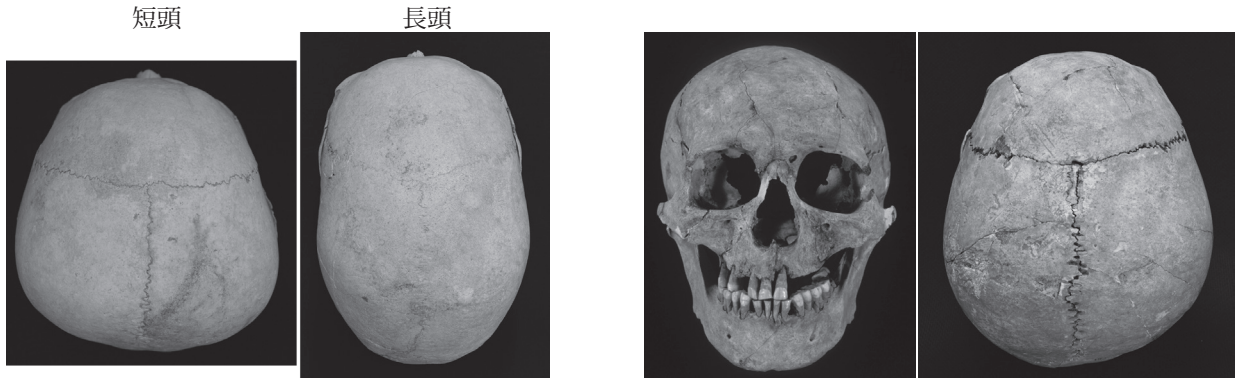
では、弥生時代から後の現代にかけての変化とはどのようなものかを見ていきたいと思えます。中世の人々を見てみると、上顎と下顎の咬み合わせのところがとても出っ歯になっております。また頭が前後にすごく長くなってきます。これらが中世の特徴です。この中世、人々が日本列島の外から入ってきたわけではないです。大陸とかから人が入ってきて混血でこのようになったわけではない。けれどもこういう風に変っている。身長を見ていっても、縄文時代から弥生時代にかけてブーンと身長が上がります。縄文人の男性は158cmくらいです。これが弥生時代になると163cmとかになります。この上がった変化は遺伝の、混血による変化だと考えられます。ここから日本列島はずっと身長が下がっていきます。一番低いのは江戸時代で、男性で155cmくらいということになります。この間外から人が入ってきたわけではなくて、日本列島の中で狭い地域の中で結婚して子孫が続いてこのようになっています。そして現代は、男性は170cmに近いか超えるくらいなのではないでしょうか。この変化は栄養の変化とか生活、ライフスタイルの変化で変わっていくものであります。骨って変わっていくんだけど、我々はこういう骨の色んな部分を測ったり、観察したりして、どこからやってきたんだろうか、どこの人たちと近いからこの人たちは関係があるのか、ということの研究しております。

それで南九州の縄文時代、古墳時代の話なんですが、南九州では縄文時代に少し人骨が出ます。南九州で縄文時代の保存の良い人骨というのは、残っていても10体くらいです。その次の弥生時代になると、ほぼ皆無であります。南九州の本土で1例だけで、それらはもうボロボロの状態の人骨で、そこから特徴を探るのは中々厳しい状態です。そして古墳時代は地下式横穴墓をはじめ、人骨がたくさん出てきますので特徴がわかるのですが、古墳時代の人々の顔つきや体つきを知る上で、これから縄文時代の人々を見ていただきたいと思えます。

写真11は鹿児島県の大隅半島の^{くぬぎぼる}終原貝塚というところから出てきた人骨です。顔の部分は本土の縄文人と変わりありません。ただし、頭が上から見るとすごく丸いんですね。前後に短くなってきます。写真12は極端な例を出しています。左は短頭、頭が丸く絶壁頭ですね。右の中世の人骨は日本列島全体で頭が前後に長くなってきます、幅に対して前後が長いということがわかると思えます。写真13でもう1例、



写真 11 柁原貝塚 97-3 号人骨 (男性・壮年) (垂水市)



広田遺跡

やどん屋鈍中世

写真 13 柁原貝塚 95-2 号人骨 (男性・熟年) (垂水市)

写真 12 短頭と長頭の比較

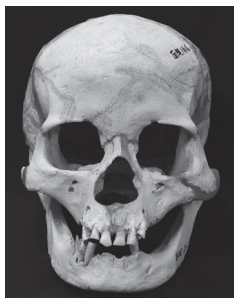


写真 14 おもなわ 第1貝塚
出土人骨 (女性・老年)
(徳之島・伊仙町)

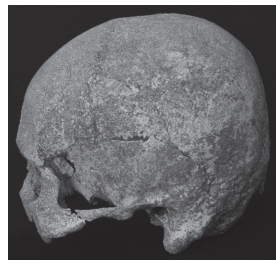


写真 15 面縄第 1 貝塚出土人骨 (女性・老年) (徳之島・伊仙町)

柁原貝塚、大隅半島の縄文人を示します。先に示した例と同じような特徴です。他の日本本土の縄文人と基本的には変わらないけれども、頭を上から見たときに丸さがちょっとあるということが特別です。

では他のところはどうか。種子島の縄文人は顔だけ見てみれば、本土の縄文人に近いということになります。先ほどから言っていますが、大隅半島と同じで、頭を上から見るとどうかというとやはり丸くなっているんです。

ではもっと南の奄美・沖縄の人々はどうかということになります。写真 14・15 は奄美・沖縄の縄文人です。そうすると、本土の縄文人や種子島の縄文人よりも一段低い、顔の高さが低くなります。顔の上下の長さですね。そのために幅があるように見えてきます。眼窩が四角くなってきます。そしてもう一つの大きな特徴は、写真 15 にあるように、この地域の人はずいぶん絶壁頭なんですね。ずいぶん短頭で短頭の度合いがすごい。そして身長が本土の縄文人よりも一段低いような状態です。これらが紛れもなく、奄美群島の地域では今のところ非常に均質な状態でバラつかない、変異がない、こういう状態が出てきます。

それでは最後になりますが、南九州の古墳時代人は、ということになります。第 1 図を見ると古墳時代、

地下式横穴墓が分布しています。宮崎平野と内陸の方です。この都城盆地からえびのにかけての地域というのは、内陸の地域が本土の縄文人みたいな感じ、上部中央の写真は菓子野小学校の近くから出てきた人骨です。上部右側は宮崎の平野部の国富町から出てきた人骨ですが、これは渡来系の弥生人に似ています。そして内陸部の中でも、先ほど島内という地下式横穴墓が出てきましたけれど、ここは顔つき自体はデコボコした立体的な顔つきをしながら、身長が高かったり、顔が高かったりとちょっと内陸部の中では違っていきうだと言えます。それで古墳時代の南端のところ、土坑墓とかがありますけれど、こういったところで頭の丸い人骨が出てきています。あとは種子島ですね、頭が丸い人骨が、先ほどの奄美・沖縄の縄文人と似たような、それと近い人たちがいるということが以前から指摘されてきたのですが、我々もこういう発掘を行うことによって、まあ居そうだと。現在の宮崎県域の方は本土縄文人と渡来系弥生人の特徴を持った地域とに分けられます。

最後になりますけれど、都城盆地の古墳時代の人々、多様な古墳がいっぱいありますけれど、今わかっているところでは地下式横穴墓と箱式石棺墓から出てきている人骨から言うと、本土の縄文人に近い顔つき、体つきの人たちがこの都城盆地の古墳時代の主な住民だと思います。当然色々な調査が進めば、渡来系弥生人に似た古墳時代の人々も今後出てくるかもしれません。今後新たに保存良好な人骨が出土すると、新たな事実が明らかになると思います。今日はこの辺で失礼いたします、どうもありがとうございました。



第1図 地下式横穴墓の分布域と各地域の人骨の特徴

*写真・図：竹中氏提供

シンポジウム「古墳をつくった人々～墓制から文化の多様性を探る～」

コーディネーター：平山淳子（MRT 宮崎放送ラジオパーソナリティ）

【平山】 それでは皆様、お待たせいたしました。これよりシンポジウムを始めさせていただきます。先生方の講演をお聞きいただきましたところで、皆さまさらにご質問や理解が進んだところもあるかと思えます。私平山より、これから代表してご質問させていただきたいと思えます。先生方、どうぞよろしくお願ひいたします。

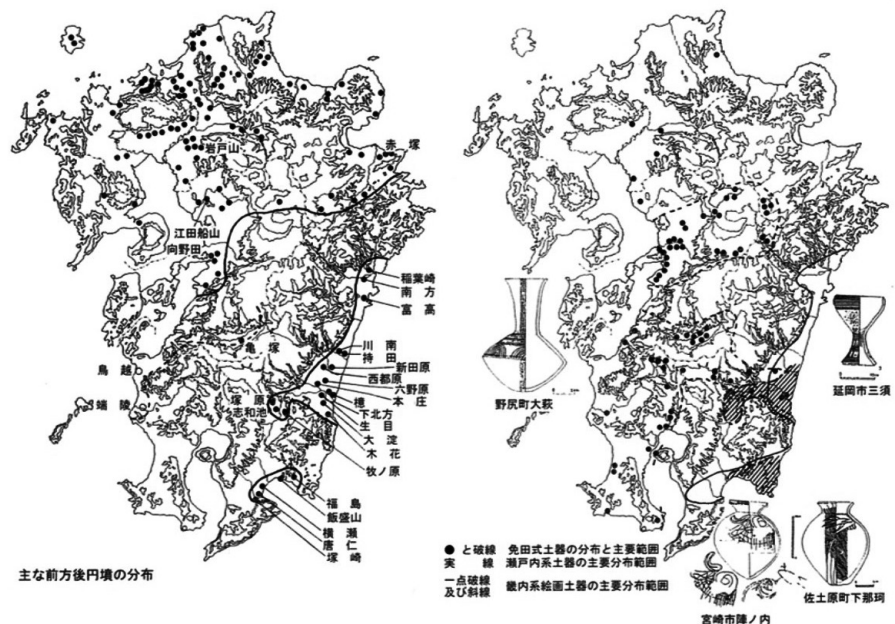


先ほどは大変興味深いご講演を頂戴いたしました。学校の授業で習った歴史の話とはまた違う魅力的なお話を色々伺うことができました。まずはお1人目にご講演いただきました北郷先生、古墳というものについて新しい理解を深めることができました。いろいろな古墳がある中、全国で一番古い古墳と言われるのが奈良県の箸墓古墳だと習ったことがあるのですが、宮崎でも生目や西都原の古墳など大変古い古墳がありますよね。ではここ九州全体でみると、一番古い古墳というのはどこなのでしょう

うか？

【北郷】 今箸墓という話がありましたが、結局奈良盆地で定型化された前方後円墳が成立する、それが箸墓です。その周辺には、弥生時代からの周溝墓、あるいは墳丘墓と呼ばれているものがあって、その墳丘墓の中で前方後円形をする、要するに前の部分が四角くなる。周りに溝があるんですが、その陸橋の部分がだんだん前方部になっていって言われている。「纏向型前方後円墳」と呼ぶ研究者もいます。そういうのは弥生時代から連続しているわけで、九州の中でも周溝墓が確認されています。この都城も年見川遺跡という遺跡が戦後まもなく発見されて、そこから周溝墓が見つかっています。県内で有名なのは、川南町に東平下という周溝墓があります。続いて「纏向型」は、宮崎県内では先ほど出てきたように檎1号とか、西都原の86号とかで

す。北部九州では小郡市、福岡の九州歴史資料館があって、近くに小郡市の埋文センターがあるんですが、そこに津古生掛古墳というのが有名です。その他南九州ですと、西側には基本的に前方後円墳は存在しないという風に考えられているのですが、第1図に白抜きで端陵と書いたところです。これは薩摩川内市で新田神社と



第1図 畿内・瀬戸内系土器と前方後円墳の分布

いう神社があって、ここはニギノミコトの御陵という風に宮内庁が定めている場所です。その丘陵の一番西側の端っこにあるので端陵と言われているのですが、端陵もいわゆる「纏向型前方後円墳」ではないかと指摘する研究者もいます。確かに形はそうなのですが、断定的ではない。あとは宇佐に赤塚古墳、宇佐の風土記の丘に行かれるとすぐ資料館の前にある特徴的な古墳ですが、前方部の真っ平らな古墳があります。

【平山】九州色々なところに前方後円墳があるということですね。第1図で前方後円墳の分布図を皆さんにご覧いただいているのですが、ご覧いただいて気付くことがあるかと思います。九州の北部では割と内陸の方まで分布しているように見えるのですが、県内を見渡しますと沿岸部に集中しているような気がします。これはなぜなのでしょう？

【北郷】第1図の右側は弥生時代の終わり頃の土器の分布ですけど、これは瀬戸内海で特徴的なワイングラスみたいな形をした土器で、そういう瀬戸内系の土器は宮崎平野を中心としたところから出てきます。それともう一つ絵画土器といって、土器に抽象的なものあるいは具象的なものを描いた土器があります。私が若い頃、もう40年前都城で調査した祝吉遺跡いわよしからも大量にその絵画土器が出ています。実は日本列島全体の中で絵画土器が出てくるのは、奈良盆地の唐古鍵遺跡からこかぎとかは代表的ですが、それとこの日向なんです。そうすると瀬戸内系、そしてこの絵画土器というのは、畿内とのコミュニケーションがあった段階の地域で出てきたのだらうと考えます。そうすると斜線部分が絵画土器の分布ですが、これを見ていくとどうでしょうか？前方後円墳の分布と重なってきますよね。だから前段階の弥生時代で畿内・瀬戸内との交流があった地域というのが一つ前提として、そこに前方後円墳というものが成立していく。考えていけないといけないのは、なぜ都城盆地だけに分布が食い込んでいくのかというのは、後の話にもなりますが、要するに扇の要の部分というのがまさにこの都城盆地ということですよ。

【平山】そういう繋がりもわかってくるわけですね。ありがとうございます。

続きまして、地下式横穴墓の話は竹中先生に伺いたいと思います。先ほど大変人骨の残りが良いという話をされました。保存状態が大変良いということで、色んな情報をそこから得られるということでした。宮崎、南九州に住んでいる私として大変興味があったのは、南九州の中でも顔つきとか、体つきとか、地域によっても差があるというお話があったと思います。これは具体的に言いますと、例えば渡来人系であるとか、縄文人系であるとか、その違っているのはどのようにあるのでしょうか？

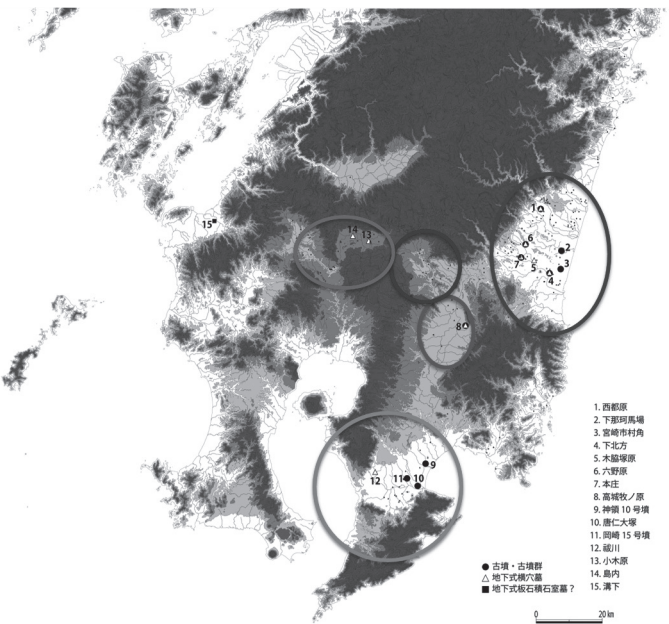
【竹中】同じ地域でもやはりその遺伝的影響を強く受けた地域や遺跡ごとに人骨の特徴が違ったりしています。地域で大きく分けると、宮崎平野の方と内陸の方では違うということが言えると思います。南九州全体で見ると、まだまだわからないというか、南とのつながりが考えられる人たちもいるだろうと思います。その人たち自身の顔つきや体つきの変化が、単純に南から人がやってきたという風になってくるのか、それとも縄文人が島の方へ渡って行って先ほど見ていただいた種子島の古墳時代人のような体質に変化していくのか、そこが今後の遺伝も含めた、DNAの研究も含めた大きな問題になってくると思います。南九州の人の顔つきや体つきについてはそういったところが今後の古墳時代研究の焦点になってくるころだと思います。

【平山】南九州に住む我々のルーツを探るような、そんなロマン溢れるお話だなと思いました。自分は縄文人か渡来系弥生人か、どちら派だなんて思っちゃる方も多いのではないのでしょうか。

続いて地下式横穴墓のお話になりますが、ここからは吉村先生に伺いたいと思います。今人骨の話がありましたが、副葬されているものもそれぞれあるかと思いますが、女性にも多くのものが副葬されているお話が大変興味深かったです。そんな中でこれは男性女性限らずですが、武器とか武具・甲冑も色々見つかるといって、何となく北部九州だと敵が攻めてくるので必要という気はするのですが、なぜこういったものがこの南九州にもあるのでしょうか？

【吉村】そうですね、本当に重要な問題だと思います。武器には武器そのものの機能としての部分と、いわゆる威信財という被葬者の位とか、それから大和王権との関わりとかも表す部分があります。例えば鏡

がそうであるように、言ってみれば被葬者のステータスを示すという側面もありますので、両方で重要なものだと思います。第2図にありますように、甲冑は主に地下式横穴墓の分布域にほとんどありますが、宮崎平野部にたくさんあります。またえびの(加久藤盆地)でもたくさん出ます。大隅半島でも出ていますが、西諸県は今のところ出ていません。都城盆地で今あるのは、高城町の^{まきのはる}牧ノ原古墳群で破片ですけれど甲冑が出ております。あと都城市内に都城市古墳という古墳がありますが、甲が出たという伝承があります。実物が残っているのは高城だけです。特に注目していただくのは加久藤盆地、なぜこういうところから出るかということ、北郷先生も書いておられますが、軍事的な力というのが大きく期待されることだったということもあるでしょうし、加久藤盆地から都城盆地までが古墳時代社会、大和王権に関わりのある社会、境界域になります。ですから一番交通の結節点でもあり、境目でもある、そういう部分でもやはり重要性があったのではないかと考えます。



第2図 甲冑出土地下式横穴墓の分布

あと性別との関わりですが、だいたいどこでも甲は男性に帰属すると言われていますが、古墳時代の中で実際に骨が残っている例というのはそんなにありません。南九州の場合は地下式横穴墓の中でたくさんの人骨が出てきますので、実際に被葬者の性別や年齢がわかりますが、実際にはひょっとしたらこれは女性に伴うのではないかという事例もあります。例えば島内地下式横穴墓の中で、冑がはっきり女性のものではないかという例があります。そうすると軍事との関わりという点でも女性がある一定程度期待されるというのは、そういうところからもあると言えるのではないかと思います。

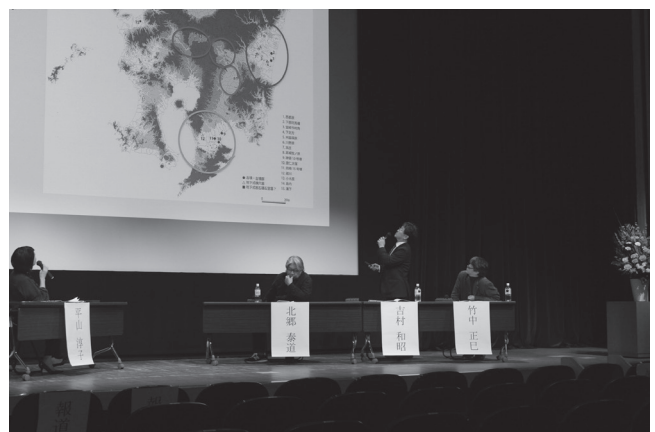
【平山】 実際身に付けて戦っていた可能性もあるということですか？

【吉村】 ただ持っているだけという可能性もあります。ですからほかの地域でも、実際甲冑が出ているから男性だろうという決め付けはすべてが正しいかはわからないのではないかと、女性に伴う甲冑の出土を少し期待はしています。

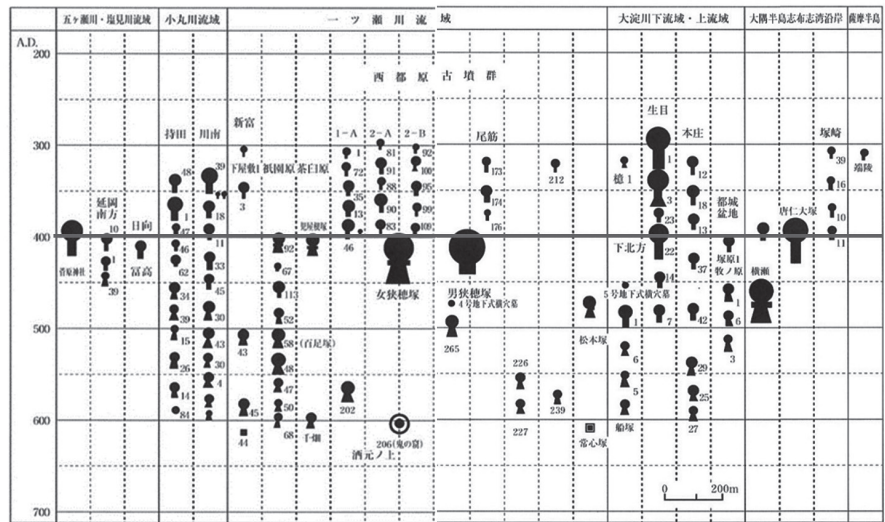
【平山】 女性の副葬品といえば耳飾りであったり、また食器、土器とかそういうものばかりだろうという概念があったのですが、そういった武器とか武具と一緒に入っていたというのは大変驚きの事実でした。そして今の話から、むかしむかしの都城は交通の要所としても要の場所だったということがわかるわけです。ありがとうございます。

それでは北郷先生に先ほどの都城盆地のお話を伺いたと思います。先ほど扇の要の部分ですが、都城盆地だとありましたが、都城はなぜ内陸にも関わらず前方後円墳があったのでしょうか。

【北郷】 まあ前方後円墳だけではなくて、地下式横穴墓の場合はえびのや鹿児島県の大口盆地から東側、宮崎平野にかけてあります。それともう一つ、南九州独特のお墓と言われている板石積石室墓という、板石を積んでいくお墓がありますが、これは長崎の南の方から熊本県という西側、それ

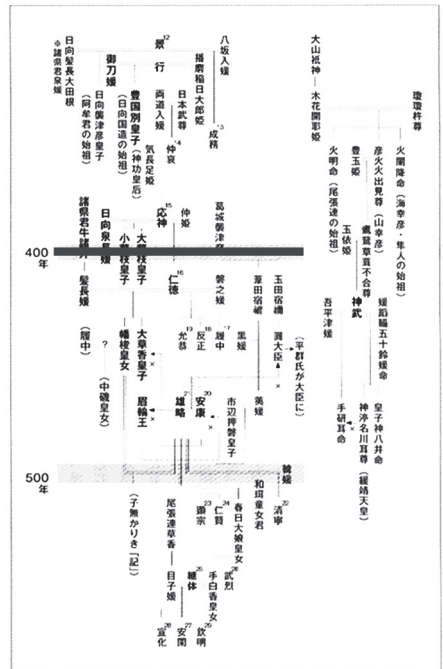


が重なっていくのがえびの、そしてこの都城では高城町の香禅寺遺跡というところでも出ています。西からの墓制と東からの墓制が重なって、それが都城盆地にある。そして前方後円墳についても第3図の、先ほど400年のラインを注目してくださいという話をしましたが、都城盆地の前方後円墳が成立するのは5世紀、まさにこのラインからです。この図で言えば都城盆地の塚原とか牧ノ原とか、この



第3図 日向における前方後円墳の変遷

ラインの時期から前方後円墳が造られ始めるということがポイントです。最初は生目古墳群だとか宮崎平野で大きな前方後円墳ができてくる、それに後続する時期くらいにこちらに出てくる。ではそれはなぜなのか。そこはやはり考古資料だけでは理解できない。第4図の大王との婚姻関係図、応神天皇が日向泉長媛と、仁徳天皇が髪長媛と、そしてここに大葉枝・小葉枝だとか大日下、幡梭皇女というのは若日下、これは小さい存在ではないんです。要するに宮家なんです、皇位継承し得る子どもたちが、日向系の子どもたちがいる。それが誕生してきたのがまさにこのラインということです。【平山】そういったつながりがここ都城盆地に前方後円墳があることにつながっているかもということですね。



第4図 『日本書紀』にみる大王との婚姻関係

【北郷】まさにここが髪長媛の、私は伝承だけではなくて実在していると思います。そしてこの系譜の問題は、先ほどの双系制の問題からいうと、母系の系譜を辿れば諸君君泉媛というのが景行天皇の時代に出てきます。それでその後、実は母系の系譜が繋がっていくんです。ですから小林とかが泉媛だとすれば、この内陸の小林から都城にかけての霧島連山周辺の盆地地域というのが、諸君君の本貫地であり、そこに前方後円墳がまさに畿内で宮家ができる段階で生まれてくるんだということです。

【平山】なるほど。何となくこの都城出身の私たちにはわくわくするようなお話も含まれていると思います。今髪長媛のお話が出ましたので、高城町の牧ノ原古墳群の話に移りたいと思います。牧ノ原古墳群には多種多様な古墳がありますが、お墓の中にはたくさんの副葬品もあります。先ほど吉村先生に副葬品の話で階級の話もいただきましたが、やはり一緒に埋葬された副葬品から埋葬された方の階級であったり性格であったりというのは容易に推測できるものなのではないでしょうか？

【吉村】おおよそ関連する部分が多いと思います。ただやはり関連しない部分もあるので、それは中央との関係性とか色んなもので変わってきます。例えば、個人的な勲功、手柄があったりしていっぱいもらった場合は、イレギュラーにたくさん入っている場合もあるのではないかと思います。牧ノ原の場合、それほど古墳の中身がたくさんわかっている事例がないのでわかりませんが、やはり前方後円墳・円墳という階層性はあると思います。一つ注意しなければならないのは、円墳の被葬者を入れる埋葬施設が地下式の

場合があります。地下式横穴墓も墳丘を持っている事例というのはたくさんありますので、必ずしも地下式横穴墓と高塚は対立する関係ではありません。中には宮崎平野部で、前方後円形の墳丘を持って、地下式が主たる埋葬施設という事例もありますので、中々単純な話ではありません。

【平山】 そのあたりはまた多種多様なんですね。そういったところを探っていくのも当時の人たちの生活・組織を知っていく上でも重要な手掛かりになりそうですね。副葬品のお話、お墓の種類によってもまた当時の人たちの姿がわかるということ



写真1 高城牧ノ原箱式石棺墓出土人骨

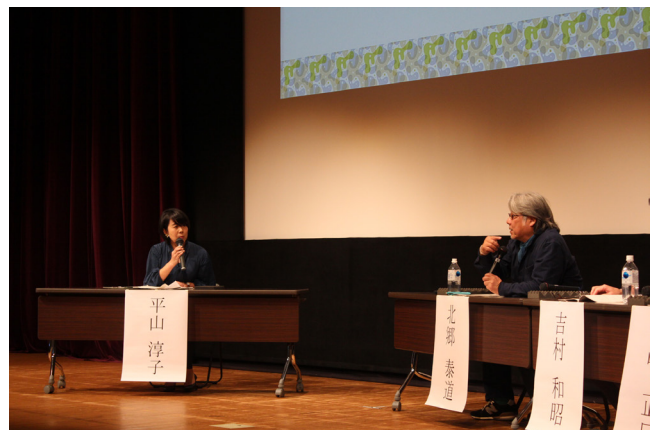
でしたが、気になるのはやはり実際に埋葬されている方ですね。牧ノ原古墳群の埋葬されている方の特徴等があればぜひ、竹中先生に教えていただきたいのですが、いかがでしょうか？

【竹中】 はい、高城牧ノ原古墳群からは人骨が小さな破片のものも含めると4体だと思われています。講演の中にもありました写真1の赤い人骨が牧ノ原古墳群で一番残りが良い人骨です。頭が一番残りが良く、右の目から右のほっぺた、そして顎にかけては壊れてしまっていて、土に帰ってしまっています。ですから顔で言うと半分くらいしか残っていません。この方の特徴は、縄文的な特徴を持った人で、石棺の中に納められてますが、都城盆地の現在見つかった残りの良い地下式横穴墓から出てくる人たちとそう変わりはないと思われます。顔も低くて、想定すると鼻の幅も広い。そうすると縄文人的な彫りが深い感じの女性の方だと思います。

【平山】 私たちが普段目にする髪長媛とはちょっと違う感じですね。1体しかわかっていないということですので、今後どのように研究が進んでいくのが楽しみです。ありがとうございます。

古墳というのは多種多様にあるわけですが、牧ノ原古墳群のように同一地域に多様な古墳が造られるということがあります。地理的な要因なども踏まえながら、この同じ地域に多種多様な古墳が造られるというのはどういうことなのでしょう？北郷先生をお願いします。

【北郷】 そうですね、都城盆地だけではなく、九州の中にはへそみたいな場所があります。一番北は阿蘇、阿蘇にも前方後円墳があって、その東側の高千穂町あたりには前方後円墳がありません。もう一つは南の方に行くとき吉、球磨盆地ですね。ここにも前方後円墳があって、第1図でみると西側にはないいいながら、^{かめづか}亀塚というところは前方後円墳が存在する場所です。それと同時に板石積石室墓もありますし、地下式横穴墓の分布から行くと少し離れますが、実はここで地下式横穴墓も発見されています。都城と同じように地下式横穴墓があって、板石積石室墓があって、前方後円墳があって、というような場所です。地勢的なことを考えると、内陸だからではなくて球磨盆地というのは、八代平野と南部の球磨川流域を繋ぐルートがある。もう一つは阿蘇と繋ぐルートがある。そういうルートを考えていかないと、なぜ内陸の球磨盆地に前方後円墳や多様な古墳が成立したのかということとはわからないだろうと思います。そこで都城を見ると、一つは肝属平野に出るルートというのがとても重要です。遺跡はドットされてませんが、この内陸のルートは非常に重要です。後の時代ですが、北郷氏（後の都城島津氏）が内之浦を持っているんです。島津の宗家の方は西側を占めていて、都城島津は東側を、海を治めていたんです。ですからこの内陸盆地の中でも海上交通を持って運ばれてくるものが見つかる。古墳時代に遡っても、内陸に閉じ込められていたのではなくて、海に繋がっている。その海をコントロールするというのが、諸君の最も得意とするところなんです。



【平山】お話を聞いていると、内陸のイメージが変わってきますね。

【北郷】内陸内陸というけれども、必ず海に向かって開いているんです。

【平山】そしてそれが後の時代の流れにも大きく影響しているということですね。大変興味深いお話でした。

それでは、本日会場の皆様方からたくさん質問もいただいておりますので、先生方にお答えいただきたいと思います。では1問目は北郷先生にお答えいただきたいと思います。南九州の勢力と大和政権との関係について、支配関係なのか、同盟関係なのか、教えていただければよろしいでしょうか。

【北郷】これは全く対等な同盟関係です。先ほど「前方後円墳体制」という話をしましたが、基本的には4～5世紀前半くらいまでは連合体制です。まだ後の天皇、大王が頂点に立つという構造ではなくて、古墳時代を通じてできていったわけです。初期の段階は全く対等な関係です。支配された服属関係だと見ない方がいいでしょう。それと日向系の宮家が存在していたと、これは東大阪市の日下^{くさか}という場所を根拠地にして、まさに「日下の王都」を築いていた日向系の勢力が存在した。これはやはり『古事記』『日本書紀』をきちんと読んで評価しないとイケません。

【平山】考古学的な資料ばかりではなく、『古事記』『日本書紀』を読み解いていくと理解が深まっていくということですね。

それでは次の質問は竹中先生にお答えいただきたいと思います。2つ質問があります。1つ目は、都城盆地でこれまでに何体くらい人骨が発掘されているのか、また男女の比率に差はあるのでしょうか？

【竹中】今まで都城では人骨は150体以上発掘されています。ただ、先ほど高城牧ノ原古墳群の話しましたが、全部が全部残りの良いものばかりではありません。一つ一つ数えるとこれだけあります。ただ私たちが計測したり観察したりするのは、残りが良い状態のものしか情報を引き出せないものですから、その数はまた限られてくるということになります。

男女の割合は4:6くらいで、女性の方が今のところ多いという感じです。基本的にはそんなに偏ってはいません。当然男女同じように亡くなりますよね、そして同じようにお墓に埋葬されます。

【平山】人口比の差があったわけではなく、偶然ということですね。

次に傷を受けた人骨の話も資料の中であって、私も大変興味深く読ませていただきました。昔の人々は平和に穏やかに暮らしていたというイメージがありました。受傷人骨はいったい誰と戦ってそういった傷を負ったのか、竹中先生としてはどのようにお考えでしょうか？

【竹中】保存状態の良い人骨が地下式横穴墓から出てきますが、地下式横穴墓の中で受傷人骨は7例確認されており、そのうち6例は島内地下式横穴墓群に偏って存在します。あとの1例は国富町^{じょうしんぼる}の常心原というところになります。これらから考えると、拠点的というか、島内の人たちは何かしら戦いをしていた。最初私が島内の発掘調査に携わらせていただいたのは1993年くらいになりますが、90年代に調査をさせていただいて考えていたところではまだまだ小数例で、これはムラの中でお互いにいざこざがあって、それで傷を負って亡くなったという風に思っていました。そういう要素を捨てきれないでおりましたけれど、調査が進んで、現在170基を超える地下式横穴墓が島内からは見つかっています。そうする



と、これだけ多くの人骨に傷があるというのは、非常に特異的なことです。他のところとはちょっと違うということになります。集落間の戦闘が確実にあったと、首を切られたりとかですね。北部九州の弥生時代の甕棺から出てくる人骨などと言うと、出土人骨全体の割合のだいたい2.5%くらいが受傷しています。これで戦闘があったという風に判断されます。ここで島内の出土人骨から計算をすると、2010年当時で計算したところ、島内はそれを上回る数値になります。ただし、多く

の鉄製の武器が副葬されていますが、鉄製の武器で傷つけられた例というのは、島内 99 号墓 2 号人骨と 104 号墓 2 号人骨です。あとは何か石の類なのか、鋭いものではなくて殴られた事例になります。ですから、戦いがすべて鉄製の武器を持って行なわれていたわけではなく、ちょっと前の前時代的な石の道具とか、そういうものが使われた可能性も考えています。ここ島内だけがこんなに出てくるというのは非常に特異で、どこかとの集落や他地域との戦いの犠牲者がこういう形で葬られているのではないだろうか、私は考えるようになっていきます。

【平山】これからさらに研究が進んでいくと、地域間ごとの戦いの事実もわかってくるかもしれないですね。ありがとうございました。戦いがあるって、人に殺されるという言い方になりますかね、そういう風に亡くなられた方の人骨も発見されているということですね。

次に吉村先生に質問です。女性の副葬品の中に武器があるという話がありました。今戦いがあったのではないかというお話がありましたが、女性も積極的に戦闘に参加していたということなんでしょうか？

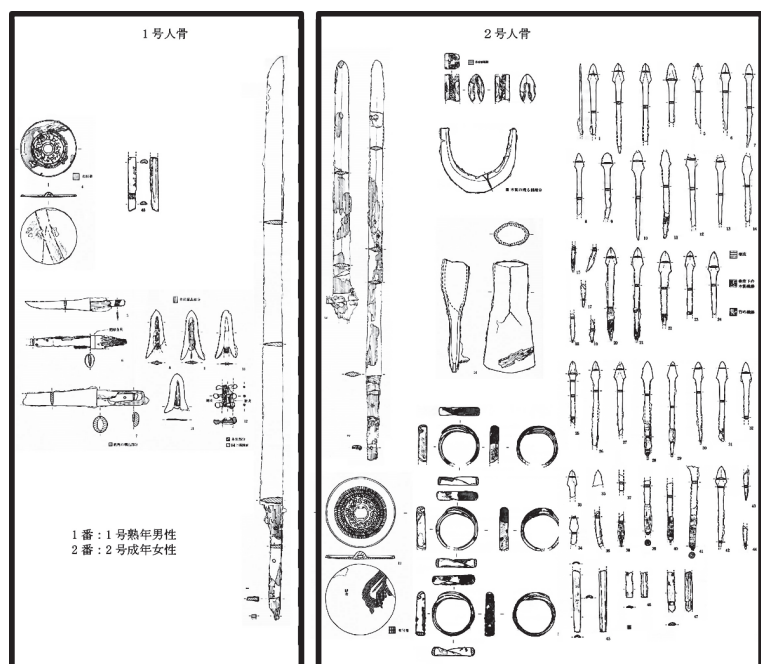
【吉村】私はそう思っています。女性が武器を持って戦をしているという、拒否反応を示す研究者もいますが、みんなが筋肉隆々でアマゾネスみたいなものを考える必要はなくて、他にも色々な役割がありますよね。女性だって薙刀を持って戦うこともありますし、戦国でもそういう事例がたくさんあります。古今東西女性が武器を持って戦闘した記録もたくさんあります。最前線で振り回さなくても、一定程度の戦力ということはあるのではないかと思います。一番問題なのは、刀剣類だけですと権威の象徴的な部分がありますので、ほかの地域でも女性に伴う例はあります。でも先ほど受傷人骨の話でもありましたが、鉄鏃や骨鏃というのは、地下式横穴墓の地域だけ女性にたくさん伴って出てきます。2本や3本だったら象徴的、儀礼的なものかと思うのですが、こちらは一束、一つの単位として出てきますので、やはり武器としての意識があると言えらると思います。親族関係の話をしてきましたが、背景としてはいわゆる双系の社会であり、父系の社会には転換していない状態です。例えば墓を造るのも成人男性の死に伴って墓を造る、そしてその人が主要な武器を持っているという状態ではなくて、女性の場合もあるいは子どもの場合もあるのですが、初葬の女性がたくさん武器を持っている、あるいは初葬でない人でも女性が武器をもっているという状況です。そういう双系の社会というバックグラウンドがありますので、そういう社会の中で女性も軍事的な役割を担っていたということも、社会の在り方としてはあったのではないかと考えます。

【平山】第 5 図が講演の中であつた資料ですが、これも印象に残る資料でした。

【吉村】左側が男性に伴う資料で、右側が女性です。両方とも鏡は持っていて刀剣も持っていますので、これだけ見るとどちらが墓の代表者かわかりません。量で言うと明らかに女性の方がたくさん持っている。鉄鏃の数を見ていただいたらわかるように、1本2本ではなく武装単位のセットで持っているということが重要だと思います。

【平山】男女逆ではないかと思ってしまうんですけど、こういったものも出土しているということですね。ご質問いただきました皆様ありがとうございました。

それでは最後に、古墳時代の南九州の文化や人々について、現代の私たちが学べるものはあるのか、そして今後どのようにアプローチしていくことで古墳時代のさらなる解明につながっていくのか、



第 5 図 市の瀬 5 号墓副葬品 (縮尺不同)

それぞれの先生方にお答えいただきたいと思います。

【竹中】私は人骨の研究をしておりますので、古墳時代の人々の骨や歯の研究から感じることを申し上げます。当時の環境の中で、古墳時代の人々が一生懸命協力しながら暮らしていた。そしてお墓の中に埋葬されているお年寄りから若者・子どもたちを見てみると、子どもたちも大事に大切に扱われていたということもわかってきます。骨や歯を見ると色んな病気にかかったり、骨折していたりということもあります。それも治っている事例や関節が動かなくなっている事例もありますが、おそらくお互い助け合いながら生活していたと思います。現代の私たちは一人ひとりの暮らしが大事になりすぎているのかもしれない。古墳時代、色んな地域や集落で、集団で助け合いながら暮らしていたんだと思います。そして当時手に入る食料資源や材料を工夫して使い、生活していました。ですから現代に生きる私たちも、それを見習わないといけないことも多々あるのではないかと考えています。

【吉村】本日の講演は20分しかありませんでしたので、時間ばかりが気になってしっかりとした説明ができなかったのではないかと反省しております。最初につかみで用意していた、昨年のおふるさと納税を都城市にしたという話をするのも忘れていました。

竹中先生のお話にも掛かってきますが、人骨が残っているということは一番の強みなんですね。今後のアプローチについてお話したいと思いますが、ほかの地域で古墳時代の人骨がこれだけ出てくるところはありません、どこにもありません。ですから、ほかの地域でこれが出ているから被葬者は男性だろうとか、武人的な性格を持っているだろうとか、色んなことを言うのもあくまでも想像でしかないんです。当たっている部分はあるかもしれませんが、実際埋まっていたのは男性かと思っていたら女性だった、あるいは逆の可能性もあります。それらのことが南九州では実態としてわかる。年齢も性別もわかる、病気も生業も（皮なめしをするような仕事とか）わかるという、具体的なイメージをつかめるのはおそらくこの地域だけだと思います。ですからモノからだけではない考古学、社会の実態というものを詳細に研究できるのは、古墳時代に関しては、ここだけといっても過言ではないと思います。日本の歴史を解明する上では非常に大事な地域だと思っておりますので、これからも研究を続けていきたいと思っております。

【北郷】今日は何曜日でしょうか？

【平山】今日は日曜日です。

【北郷】なんで日曜日？

【平山】なんで日曜日？なんで日曜日なんですか（笑）？

【北郷】基本的には木火土金水、それに日月、太陽と月を加えて七曜という考え方、これは古代中国の五行思想のものです。私は中国からやってきたとか中国から伝わったという一方的な考え方はやめた方がいいかと思います。要するに東洋思想を共有したという風に考えたいと思います。そういう陰陽五行というものを共有する時期というのはまさに古墳時代、5世紀です。宮崎に巨大古墳ができたラインを今日示しましたが、あの時期に七曜という考え方が「入ってきた」。それと死生観の問題もそうです。黄泉の国というものも、その時代に生み出されていった。それが神話という形で整理されていく。それがまさに古墳時代です。ちゃんとした暦が入ってくるのは平安時代になりますが、基本的な考え方は古墳時代からです。そういうものが入ってくる中で国造りが行われてきて、日本という国号を持つ国ができる時代、その前提になる時代です。最初は連合体制という地方分権の時代です。それを中央集権型に変えていくのが古墳時代通じての5世紀後半からになります。それが完成するのが奈良時代です。政治学的な定義で言えば、天皇制・中央集権国家ができていく、まさに「この国のかたち」を造っていくのが古墳時代である。実は今でも天皇制、中央集権国家に私達は生きているわけです。これは政治学的に定義すればそういえます。つい昨年令和になり、天皇即位関連の行事が色々ありました。私達の日常生活の中に天皇制というものは息づいている、天皇制下に生きているということになります。それがよし悪しというよりも、そういう国造りが行われてきて、その中にやはり色んな問題点も含まれていて、もし現代生活の中で問題が生じるとすれば、国造りの段階での諸矛盾というものが今も引き継がれているということです。ただし、天皇制・

中央集権国家というのを明確に定義できるのは奈良時代の80年と、明治維新から敗戦までの80年、そして今も天皇に「象徴」を付けるにしても、天皇制・中央集権国家であると言えます。そういう中で中央集権とはいったい何か？その問題点が噴出してきたのは、先ほどのふるさと納税という地方創生というものを問題とするわけです。要するに分権的なものというのが、社会が造られていく上で矛盾が噴出してきているのです。

そういうことを考えていった時に、南九州の古墳文化、地下式横穴墓というのは、大きく5つの地域に分かれる。その中でそれぞれの地域が個性を持った地域なんです。小さな地域の単位であるものが、横並びで横串を刺すように連携して南九州の地域社会ができていく。一方で前方後円墳が成立する社会というのは、ピラミッド型に頂点を作っていく、そこに集権していくというのが「前方後円墳体制」です。でも前方後円墳がなかった西側というのは分権的な社会だったのです。古墳時代だけではなくて、薩摩が外城制という形で地域単位で押さえていく、そこに武士団を配置して武家屋敷ができていくという形があるわけです。地域の単位というのが南九州の地政学的な観点から生まれてきたと言えます。

ここ都城でいうと、先ほど新しい図書館を見てきましたが、都城のまちづくりを考えた時に中央集権的なまちづくりを行うと、これは失敗するだろうと思います。もっと分権的に捉えて、地域地域をどう個性化していくかということ、そしてそれを連携するネットワークを作っていくということ、これらを考えてまちづくり・地域づくりを行なっていかなければならないと思います。それは古墳時代の一つの社会の在り方という中から学んでいけることだと私は思います。都市計画課がまちづくりをするのではなくて、私は文化財課がやっていくべきだと思っています。そういう意味で古墳・各遺跡を市民の方々に理解していただけるように説明板を立てたりだとか、そういったところからまちづくりは始まっていくと思います。【平山】先生方ありがとうございます。これからのまちづくりのヒントも今いただきましたが、皆さまはお話聞かれていかがだったでしょうか？

今、私達が暮らしているここ都城、私は生まれも育ちも都城ですが、小さい頃は「都城ってどんげな街？」と聞かれたら、「なんもないよ。」と答える大人をよく目にしていました。でもここ最近の都城の会話の中で、都城はこういうところがある、ああいうところがある、という話をよく聞きます。今お話にもありましたが、新しい図書館であったり、ふるさと納税でも大変名前が知られる地域となりました。本日古墳時代のお話を先生方から伺いまして、実は遙か昔、ここ都城の地は交通の要所であったり、また中央から一目置かれる場所であったり、特別なお嬢様が出ていた場所だったのかもしれない。そういうところに思いを馳せていくと、またここから広まっていく都城の未来というものが、色んな色を見せてくるのではないかと思います。これからも都城は色んな発展・発信を続けていくかと思えます。都城が中央に向かって発信し続けていくメッセージはどんなものなのか、ぜひ皆さんと一緒に見守っていきたいと思えますし、先生方の研究もこれからさらに進んでいくことで、ここ南九州、そして都城の魅力がさらに増していくことを願っております。

以上を持ちまして、歴史シンポジウム「古墳をつくった人々～墓制から文化の多様性を探る～」を終了させていただきます。

参加者のアンケート回答 (参加者：142名 回収：52名)

①今回のシンポジウムの内容はいかがでしたか？

良かった	38
まあまあ良かった	11
あまり良くなかった	0
良くなかった	0
無回答	3

②シンポジウムの開催時間はいかがでしたか？

長かった	9
ちょうど良かった	35
短かった	6
無回答	2



③これまでに文化財課で実施した講演会等に参加されたことがありますか？(複数回答可)

古墳時代の都城盆地 (H23.10)	3
国指定史跡大島畠田遺跡 (H24.10)	9
謎多き弥生のムラを解き明かす (H26.1)	7
おどろくべき！九州の縄文文化 (H26.10)	5
焼き物にみる武士の心 (H27.10)	2
災害とむきあう人々 (H29.1)	6
大島畠田遺跡から島津荘へ (H30.1)	14
今回初めて参加した	25
無回答	5

④今回のシンポジウムはどのようにして知りましたか？

新聞・テレビ	1
ウエルネス交流プラザ案内	1
ポスター	15
市のホームページ	6
文化財課からの案内文書	22
その他	5
親類・市役所内のチラシ・市美術館内のチラシ (2名)・知人からの紹介	
無回答	2

⑤どちらからお越しになられましたか？

市内	36
県内	8
県外	8

⑦その他、御意見等

- ・大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・内容は素晴らしいので、もう少し広く周知すべきだと思う。
- ・講師の先生方の発表時間がやや短く感じました。1人あたり30分くらいでもよいと思います。難しい用語が多くて、少し分かりにくいところもありました。
- ・とても楽しめるシンポジウムでした。機会があればまた参加したいと思います。
- ・また古墳のシンポジウムをお願いします。
- ・耳が悪いので、残念ながら聞こえづらかった。
- ・会場の照明、暗くて文字が読みづらかった。
- ・楽しかったです。もっと知りたかったです。
- ・地元の人々や職員も登壇して説明してほしい。

令和元年度歴史シンポジウム
古墳をつくった人々～墓制から文化の多様性を探る～
- 記録集 -
2020年8月25日

発行 宮崎県都城市教育委員会 文化財課
〒885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町19-1
TEL：0986-23-9547 FAX：0986-23-9549

印刷 株式会社 東謄写堂
〒885-0075 宮崎県都城市八幡町1-5
TEL：0986-22-3847 FAX：0986-22-2943

この冊子は、令和元年度国宝重要文化財等保存・活用事業補助金を受けて作成しました。



新
城

幸せ上々、みやこのじょう
新宮市教育委員会

